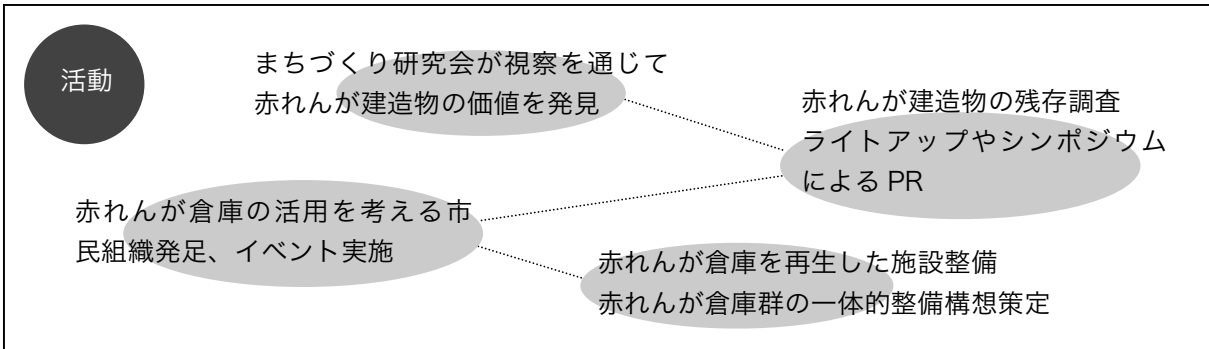
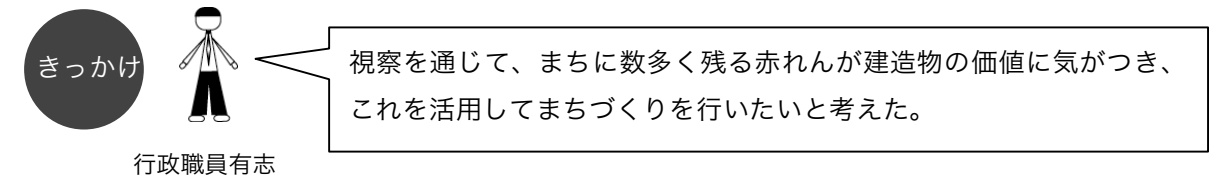




個性的なまちづくりに向けた研究を開始した市職員有志。手がかりを求めて訪れた横浜で、赤れんが倉庫活用の取り組みを知りました。

実は、東舞鶴は軍港として発展した歴史から、多くの赤れんが建造物が残っていました。日常的すぎてその価値に気がつかなかったメンバーは、まちづくりの手がかりを発見しました。

これ以降、赤れんが建造物の保存・再生によるまちづくりが開始されました。住民の関心を集めるためのイベントも開催されています。



- 効果
- 赤れんが建造物を活かしたまちづくりについて考える市民組織が生まれる
 - 赤れんが倉庫を再生した施設整備が進む
 - 住民の間で、地域資源としての赤れんが建造物の認識が芽生え、自主的な赤れんが使用の取り組みがうまれる

住民グループ	住民	行政職員有志	行政
<ul style="list-style-type: none"> ○ 赤れんが倉庫を活用したイベントの開催 ○ 赤れんが建造物の活用を考える市民組織（赤煉瓦倶楽部・舞鶴）設立 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自宅の建設等で自主的に赤れんがを使用 ○ 赤れんがを意識した土産の制作や建物のネーミング 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自主研究会を通じて赤れんが建造物の価値を発見 ○ 残存調査やシンポジウムを通じて赤れんが建造物のPR 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 赤れんが建造物を再生した施設整備（赤れんが博物館、市政記念館、まいづる智恵蔵） ○ 赤れんが倉庫群の一体的整備構想の策定 ○ 国が、赤れんが倉庫群を重要文化財に指定

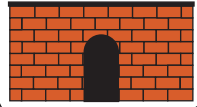
1989

横浜に視察に行こう!

舞鶴まちづくり推進調査研究会
分科会
都市の個性化

赤れんが倉庫を活かそうと計画しています

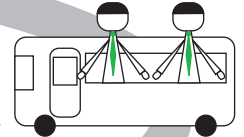
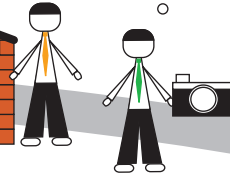
そういえば舞鶴にも赤れんが倉庫あるな...



赤れんが倉庫の活用いいんじゃないかな!!

可能性あるかも!!

市の若手職員有志からなる「舞鶴まちづくり推進調査研究会」のメンバーは、個性的なまちづくりの手がかりを探して、横浜に視察に行きます。

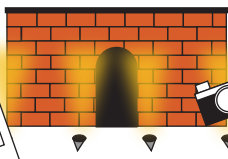


赤れんが倉庫は価値があるんです! 協力して!

手始めにライトアップだ!

視察に訪れると、横浜市職員による「まちづくり研究会」のメンバーから、赤れんが倉庫を活用したまちづくりの取り組みを紹介されました。舞鶴にも多くの赤れんが倉庫が残されていることから、その活用に可能性を感じます。

赤れんが倉庫をライトアップ



きれいだね

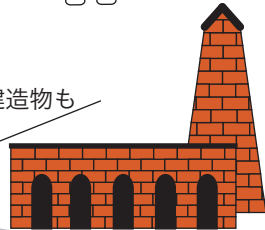
いいですね



研究会では、赤れんが倉庫のPRに取り組みます。手始めに、様々な人の協力を得ながら、赤れんが倉庫のライトアップを行いました。その美しさから市民の注目を集めます。

1994

他の赤れんが建造物も調査だ!!



あの窯は! 珍しい!!

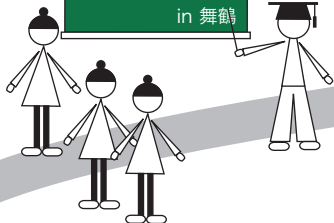


全国で5例目
ホフマン式輪窯
発見!

調査の結果、倉庫やトンネル、砲台、橋梁など120ほどの赤れんが建造物が確認されました。マスコミで報道されたことで、市民の関心も高まりました。

全国の赤れんがにゆかりのある都市と交流を深め、赤れんが建造物の活用方策を探っていくことと、横浜と共催で「赤煉瓦シンポジウム」を開催します。

赤煉瓦シンポジウム
in 舞鶴



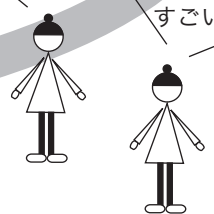
赤れんが建造物の活用方策を探りたい

マップ作ったよ 見て歩いて!!



近所にある赤れんが建造物 価値あるんだね

新聞見たよ すごいね



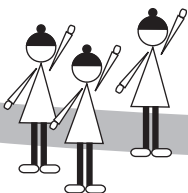
よし! これていこう

赤れんがのまちづくり宣言

シンポジウムの反響の多さに、市長が赤れんがを活かしたまちづくりをしていくことを宣言します。

1991

私たちが検討に参加できる場が欲しい!!



まいづる建築探偵団

一緒にやりませんか?

やります!

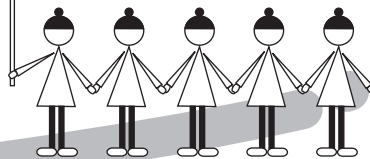


シンポジウムをきっかけに、「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が設立され、市の職員と市民と一緒に活動していくようになります。

1981

赤れんがを活用してまちづくりをしている、全国の団体との交流の場をつくろうと、「赤煉瓦ネットワーク」が結成されました。

赤煉瓦ネットワーク



「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」は赤れんが建造物の存在と魅力を全国に広めようと、ジャズフェスティバルを開催します。



1993

赤れんが倉庫を再生しよう!



赤れんがのまちを全国に発信しよう!



市では、赤れんがのまちを全国に発信するイベントにも取り組んでおり、全国からクラフトマンが集まっています。

赤れんがフェスタ

グルメコーナー アートクラフトコーナー

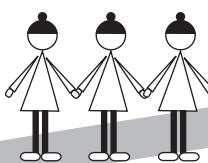


NPO 法人化しよう!!

2000



赤煉瓦倶楽部 舞鶴



「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」は、まちづくりの政策提案にも取り組もうと、NPO 法人になります。

赤れんがの道復活だ!



赤煉瓦倶楽部



みんなで掘り起こそう!

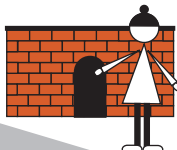


赤れんがロード

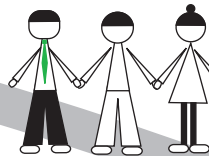
中高生が中心となり、地元企業や多くの市民が参加し、赤れんがが敷設された道を発掘し、「赤れんがロード」として再生されました。

赤れんが倉庫寄付します

2004



展示施設として整備します!!



保存活用研究会

民間企業が所有していた赤れんが倉庫が市に無償譲渡され、文化財展示施設として整備されました。

まいづる智恵蔵



赤れんがアートスクール



赤れんがアートスクール構想

赤れんが倉庫群と水辺空間の一体的な整備・活用を目指し「赤れんがアートスクール構想」が策定されました。

これからは...



市では、子どもたちにもまちづくりに関心を持ってもらおうと、舞鶴の風景を描いた子どもたちの絵の展示会を開催しています。

重要文化財

赤れんが倉庫 7 棟が調査の結果、国の重要文化財に指定されることが決まりました。

□景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント□

原則1《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

●視察を通じた赤れんが倉庫の価値の発見

- ・舞鶴の景観まちづくりは、地域に数多く残る赤れんが倉庫や赤れんが建造物を活用して進みました。しかし、市職員有志がまちづくりのための勉強会を始めた当時、舞鶴の人々には、赤れんが倉庫がまちづくりの手がかりになるという認識はありませんでした。「観光拠点形成に関する調査」[昭和59年（1984）]などで活用が提案されたことがありましたが、軍の施設であったことから、あまり良いイメージを持たれていませんでした。
- ・そのような状況の中、まちづくりの先進都市である横浜への視察において、赤れんが倉庫を活かしたまちづくりの取り組みを知ったことで、その価値に気がつくこととなりました。

>>普段見慣れている地域の景観の価値には、気づきにくいものです。他の都市を訪れたり、他の都市の人々にまちを視察してもらったりすることで、地域の特徴や地域資源の発見のきっかけになります。

●市史の研究を通じた赤れんが倉庫の価値の啓発

- ・赤れんが倉庫の価値に気づいた市職員有志は、その価値のPRに取り組みました。地域の人々や関係者の協力を得るための方法として取り組んだのが、舞鶴市史の研究でした。地域の歴史や赤れんが倉庫の歴史をひも解き、それを元に説明を行うことで、賛同者を得ることに成功しました。
- ・その後も、赤れんが倉庫の保存・活用と共に、学識経験者や文化庁等の協力を得ながら、学術的な調査・研究が進められました。そして、平成20年（2008）に、赤れんが倉庫群にある7棟の歴史的価値が評価され、国の重要文化財に指定されることが決定しました（指定名称は「舞鶴旧鎮守府倉庫施設」）。指定が決定した7棟の中には、「赤れんが博物館」や「舞鶴市政記念館」、「まいづる智恵蔵」が含まれています。

>>景観まちづくりの方向性を考える上で、歴史に手がかりを求めることは、最も確実な方法の一つです。



↑赤れんが博物館（左）、市政記念館（中）、まいづる智恵蔵の内部（右）

●赤れんが倉庫群を核としたまちづくり

- ・「赤れんが博物館」の整備[平成5年（1993）]以降、周辺での施設整備が進みました。市役所に隣接する赤れんが倉庫は、「舞鶴市政記念館」として改修されました[平成6年（1994）]。また、赤れんが倉庫群の一角にあった赤れんが敷設された道が、中高生を中心に掘り起こし作業が行われ「赤れんがロード」として整備されました[平成15年（2003）]。平成16年（2004）には、「舞鶴市政記念館」に隣接する、民間企業が所有する赤れんが倉庫が市に無償譲渡され、市の文化財の

展示スペースや、交流スペース、研究スペース等を持つ施設「まいづる智恵蔵」として整備が進められました [平成19年 (2007) に開館]。

- ・平成18年 (2006) からは、赤れんが倉庫群の一体的な整備を目指し、保存・活用方策の検討が進められ、「赤れんがアートスクール構想」としてまとめられました [平成20年 (2008)]。この中では、赤れんが倉庫群と水辺空間との一体的な空間整備イメージや、赤れんが倉庫の活用方策等が提案されています。今後、この構想を元に、整備が進められる予定になっています。

>>歴史的建造物を活かした景観まちづくりにおいては、建物本体のみでなく、周辺地区も併せて整備に取り組むことで、その価値が高められていきます。



←赤れんが倉庫群の空間整備イメージ
(出典：舞鶴市赤れんが倉庫群保存活用検討委員会
『舞鶴赤れんがアートスクール構想』)

原則 2 《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

●市職員有志の自主的な取り組みが導いた、行政による赤れんが倉庫活用の取り組み

- ・舞鶴の景観まちづくりの気運が高まった背景には、市職員有志による、自主的な取り組みの成果がありました。横浜市への視察を通じて赤れんが倉庫の価値に気づいた市職員有志は、赤れんが倉庫のライトアップや、赤れんが建造物の残存調査等の活動に自主的に取り組みました。さらに、全国の赤れんがにゆかりのある都市の人々と、舞鶴市民約140名の参加を得て、「赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」を開催しました [平成2年 (1990)]。このシンポジウムでの参加者の反響の高さに、それまでは赤れんが倉庫の活用に積極的ではなかった市長が、今後、赤れんが倉庫を活かしたまちづくりにとりくむことを宣言しました。これがきっかけとなって、その後の活動へと発展していきました。

>>無理のない範囲で、各自がやれることに取り組んでいくことが、地域の人々の景観まちづくりに対する意識の啓発へと繋がります。

●住民によるまちづくり組織の設立と、他都市とのネットワークの形成

- ・「赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」をきっかけに、市民の間で景観まちづくりの気運が高まったことに応えて、住民を中心とした組織である「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が設立されました [平成3年 (1991)]。これにより、それまでは市職員有志が中心となっていた活動の幅が広がっていきました。
- ・また、「赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」の中で、全国の赤れんがにゆかりのある都市の間で、交流と情報交換の場を設立しようという動きが起こり、それが実現される形で、全国5市から7団体が参加して「赤煉瓦ネットワーク」が結成されました [平成3年 (1991)]。これ以降、全国の都市との連携を図りながら、景観まちづくりが進んでいくこととなりました。

>>行政職員は様々な情報や補助金活用等のノウハウを持っていますし、住民は職業や趣味に応じた特技を持っています。多くの人々の力を結集することで、多様な展開が可能となります。

>>他の都市と連携や交流を図ることで、活動推進のための情報交換や、ノウハウの獲得を行うことができます。

●市民や行政による、建物の建設における自主的な赤れんが使用

- ・赤れんがに対する認識が高まっていく中で、個人の住宅建設や行政の施設整備においても、自主的に赤れんがを使用する動きが起り始めました。庁舎や派出所、国道の横断地下道、トンネルの坑口、自衛隊施設の塀などで使用され、まち全体に赤れんがの存在が浸透していきました。

>>様々な人々が可能な範囲で協力することが、まち全体での景観形成に繋がります。

●多様な活動展開を目指したNPO法人の設立

- ・「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」は、様々な活動に取り組む中で、地域の中でより認知された団体となり、まちづくりに関する提言を行うことや、運営経費の捻出等を目的に、NPO法人格を取得しました[平成12年(2000)]。これをきっかけとして、「赤れんがフェスタ」の企画の一部を受託・運営するなど、新たな活動に取り組み、実績を積み重ねていきました。そして、平成18年(2006)からは「舞鶴市政記念館」の、平成19年(2007)からは「まいづる智恵蔵」の指定管理者となり、施設の管理運営に取り組んでいます。

>>活動の目的や内容に応じて組織形態を工夫することで、幅広い取り組みが可能になります。

原則3 《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

●ライトアップやシンポジウム等のイベントを通じた赤れんが倉庫のPR

- ・赤れんが倉庫の価値に気づいた市職員有志が、PRのために取り組んだのがライトアップでした。その美しさによって人々の注目を集めることとなり、また、新聞で報道されたこともあり、地域内で、赤れんが倉庫に対する認識が広まることとなりました。
- ・「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」では、赤れんが倉庫の存在と魅力を地区内外に広めるために、「赤煉瓦サマー・ジャズ・イン舞鶴」を開催しました[平成3年(1991)より]。著名な演奏家を招待したことでジャズの専門誌でも取り上げられ、全国から聴衆を集めることに成功しました。この様子がマスコミで取り上げられたことで、舞鶴の赤れんが倉庫の存在が、広く知られることとなりました。
- ・市でも、「赤れんが博物館」の開館以降、赤れんがのまちを全国に発信するためのイベント「赤れんがフェスタ」にも取り組みました[平成5年(1993)より]。赤れんが倉庫群を活用して、舞鶴が発祥と言われる肉じゃが料理や海軍料理を提供するグルメコーナーや、れんがを用いたアート展などが行われています。

>>様々な人が気軽に参加できるイベントを通じて、地域の景観資源に実際に足を運んで賞うことで、地域の人々の認識が高まることとなります。また、イベントの様子がマスコミによって報道されることで、景観まちづくりの取り組みを、広く発信することができます。



↑赤れんが倉庫に囲まれ、様々なイベントの会場となる、通称「三面煉瓦」。



↑赤れんがフェスティバルの様子。赤れんが倉庫内や周辺の空間を利用して様々なイベントが開催されている。

●赤れんがをテーマとした博物館の開館

- ・ 赤れんが建造物を活かしたまちづくりの気運が高まる中、市制50周年記念事業の一環として、赤れんが倉庫が改修され、「赤れんが博物館」として整備されました [平成5年(1993)]。現役の倉庫として使用されているものも多く、内部を見学できる赤れんが倉庫がなかった状況で、このような施設が整備されたことで、まちづくりのシンボルとなる建物が誕生することになりました。
- ・ 当初、「赤れんが」というテーマに対する不安や反対もありました。しかし、世界39カ国のれんがの収集・展示や、れんがに施された刻印や浮き彫りを切り口とした文明や近代化の紹介、日本各地のれんがやれんが建造物の紹介といった、展示内容の工夫により、年間6～7万人が訪れる博物館となっています。

>>地域のシンボルとなるような施設が整備され、多くの人々が訪れることで、景観まちづくりに対する関心が高まることになります。

>>地域をテーマとした博物館等の設置・運営に当たっては、展示内容を工夫することで、多くの来館者が訪れる魅力的な施設が生まれます。

●子どもを対象としたまちづくりへの意識啓発

- ・ 赤れんが倉庫を活かしたまちづくりが進む中、子どもたちを対象として、まちづくりに関心をもってもらおうという取り組みも行われています。
- ・ 平成15年(2003)に、赤れんがが敷設された道の掘り起こし作業が行われ、「赤れんがロード」として整備されました。この作業は、中高生を中心に地元の企業や多くの市民が参加し、発掘作業を実施、また、子どもたちが、日干しれんが作りに挑戦するなど、遊びの要素も取り入れながら、子どもたちを巻き込んで活動が行われました。
- ・ また、地域の小学校と連携し、文化財の中で、地域の歴史や風景を学ぶ教育を実施、赤れんが倉庫群内での写生や子どもの思いを伝えるメッセージ展を開催しました。

>>景観まちづくりの継続においては、子どもに対する啓発も大切です。子どもの頃から地域の様々な景観に触れることが、深い地域理解や地域への愛着に繋がり、景観まちづくりに取り組む姿勢を育みます。



↑赤れんがロードの整備の様子(左)と 整備された赤れんがロード(右)